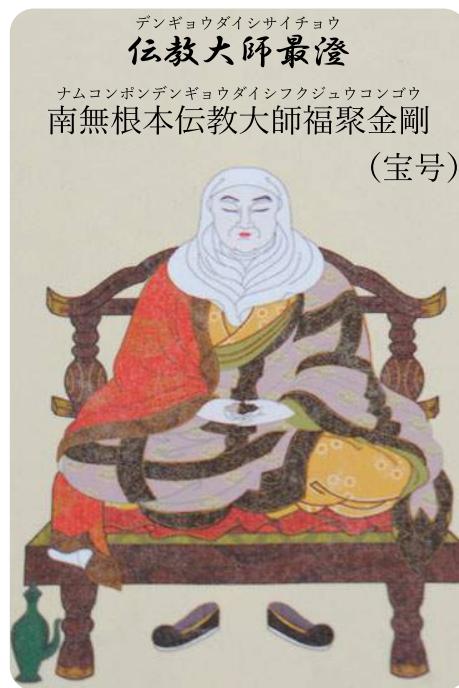


★回りて向かう～仏壇について その三～

前号の1ページでもお伝えした通り、仏壇中央に祀られている阿弥陀様については次号に譲り、今回はその両脇に祀られた天台大師（右）と伝教大師（左）について、さらには位牌を祀る威儀についてズバリお答え致します。



・そもそも護国寺の宗派とは？

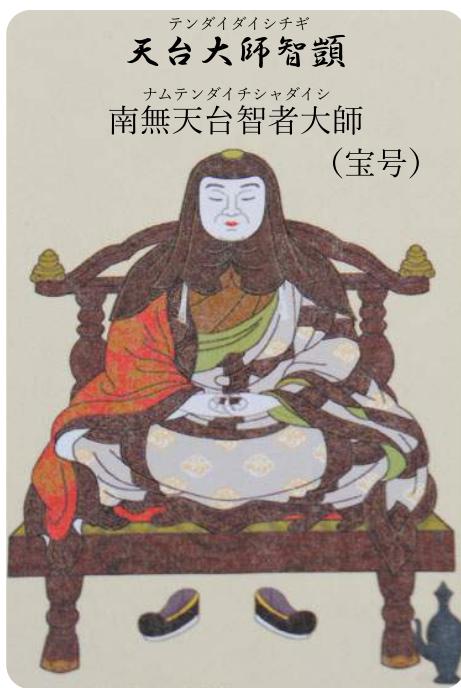
第1号でも明記しておりますが、護国寺は本山修験宗の寺院です。

修験とは、主に山岳に於いての厳しい修行を通して自らの五感を浄め、森羅万象の中に神仏を感じていく仏教の実践体系を意味します。

大きく分けて天台宗と真言宗、それぞれの修験があり、本山修験宗は天台宗寺門派の法脈を受継いでいます。

私も山修行の際には鈴懸と呼ばれる山伏装束に身を包みますが、日常本堂に於いては天台宗寺門派の威儀に則り、葬儀や法事にあたっております。

ですから、檀家様の御仏壇も基本的には天台宗の形式をお奨めしております。



・天台大師智顕（右）（538～597年）

『定慧双修』という禅定と智慧を深める修行を生涯を通して実践し、その境地を最も如実に表した経典こそが妙法蓮華経であるとする天台思想の基礎を築かれました。

天台という名は、予てから道教の聖地であった天台山に智顕が隠棲され、その山中の華頂峰で大悟を得し、以後その入寂の時まで天台山を活動の拠点とされたことに由来します。

当時の中国は南北朝時代の末期であり、南朝の梁に生まれ後の陳そして統一王朝隋という戦乱の時代を生きた智顕は、権力者の勢力の下に踏みにじられた多くの市井の人々の絶望と悲しみをその肌身で感じて来られました。後に総合仏教と呼ばれる形態を成す天台宗ですが、そうなる所以として、広く世を利する為にはその土台は豊かであろうとする智顕の想いがあったのかもしれません。

・伝教大師最澄（左）（767～822年）

智顕の思想を受継ぎ、「宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす。」との言葉通り、日本の将来の国宝を育成するための大きな土台を固め、不滅の法灯を燈しました。

現在の滋賀県比叡山の麓に生まれた最澄は、エリートの家系に生まれ頭脳明晰にして求法の念も人一倍であったにも関わらず、19歳で正式な僧侶になった途端、自らを愚中極愚の凡夫であるとして宗教的懺悔を起し、崇高な発心によって比叡山に12年間籠ります。

徹底的に己と向き合い、自身が成すべきことを確信した最澄は、その後入唐の機会に恵まれ天台山に登ります。帰国後は、弘法大師空海と並んで、それまでの日本に既にあった雜部密教を大きく更新する純部密教の普及に努めました。以後現在でも、比叡山からは最澄の志を継ぐ多くの国宝が山を下っています。

・なぜ位牌を祀るのか

『心のよりどころ』、悲しいかな昨今はどうして無難で安易な言葉に聞こえてしまします。が、しかし、敢えて位牌の意義を問われるとすれば、これにはもう「心のよりどころとして下さい。」としか、私には言いようありません。

牌という名が付くことからも、その成り立ちは中国の儒教文化に根差しているのは間違いないのですが、加えて日本古来からの神道に見られる、祖靈が降りて来られる為の『依り代』としての側面もあります。

「位牌を置く必然性は何なのか？」などの少々の懷疑も、「ただ何となく、昔からの風習だから守っていこう！」という心のゆとりに変えて、どうかこの先も大事にしていただきたいものです。それで決して損はないはずですから・・・。

お知らせ

※経典をお求めの方はお気軽に護国寺までお電話ください。

1200円程度でお買
い求めいた
だけます。

